2018・2号

直江の津

◉特集◉

「日本遺産」認定記念
荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
～北前船寄港地・船主集落～

国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中⑦
―笏谷石を求めて―

巻頭エッセイ◉わたしの直江津
このまちの魅力

歴史は「今日」への手紙
市民の名誉「どぶね」

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

43号
2018・12-2019・6

このまちの魅力

三宅莉依

私が初めて直江津に来たのは四年ほど前のことです。その日は約束までに少し時間があったので、特に理由も持たずふらっと直江津港へ立ち寄りました。見慣れた日本海でしたが、季節は冬、冷たい風が吹いていたこともあってか寂しい印象を受けました。

私の出身は石川県能美市（九谷焼の産地であり、ゴジラこと元プロ野球選手松井秀喜さんの出身地）です。これまで地元を離れたことはありませんでしたが、初めて直江津を訪れた一ヶ月後に上越に住み始め、ご縁をいただき平成二九年の春からは直江津駅前にある（直江津学びの交流館）直江津地区公民館で公民館主事として勤務しています。直江津歴は短いですが、直江津って知れば知るほど面白いまちだなと感じます。気が付くと愛着が湧いていて、なんだか興味をそそられている私がいます。そんな私がこの直江津に感じている魅力を三つご紹介したいと思います。

まず、直江津といえばやっぱり祭。実は、今年初めて二歳の子どもを連れて祇園祭へ行きました。息子はあの熱気のなか、終始大興奮で各町内の屋台へ走り目の前まで行くと笛や太鼓の音色に興味津々で、目をキラキラと輝かせ屋台をじーっと見つめていました。電車に乗って祇園祭へ行くことが我が家も夏の恒例行事になりそうです。

次は、「発酵のまち上越」を代表するふるさとの味。我が家で毎朝いただくお味噌汁の味噌は、決まって〈雪ん子〉みそです。上越に来たばかりの頃はまだ実家の母の味が一番でしたが、気が付けば自分で作る雪ん子みそのお味噌汁が一番ホッとする味になりました。

そして一番好きなのは、古砂丘の上に広がるあの町並み。小路を抜けて家々の間から見える海。きっと直江津の皆さんにとってはそこにあることが当たり前で、日常過ぎる程の景色だと思いますが、丘陵地に住んでいた私にとってはとても魅力的です。その魅力について、うまく言葉で表現できないのが残念ですが、なぜか惹かれる景色です。

少し話は変わりますが、公民館事業で吉野秀雄歌碑へ立ち寄った時のこと。恵比寿稲荷神社の奥にある吉野秀雄歌碑が建つ高台からは直江津の海が一望できるのですが、その日は晴れていて空気も澄んでいたため、うっすらと能登半島を望むことができました。遠いと思っていた私のふるさと石川県がずっと近くに感じる出来事でした。

公民館事業を初めて実施した時は、参加されるのはどんな方々だろう、浜の人ってちょっとこわいかも…、なんて不安も正直あったのですが、そんな不安はすぐに消え去りました。皆さん優しい方ばかりで「そんなに気を遣わなくても大丈夫」と笑顔で声を掛けてくださり、気が付けば兄や姉のように、また父や母のように温かく見守り支えて下さっていて、今では講座でお会いすることがとても楽しみになっています。

参加者の方はもちろん、講師を引き受けて下さる方や様々な場面で相談に乗ってくださる方など気が付けば直江津で多くの人との出会いがあり、色々な支援をいただいているおかげで今があります。

「西と東があうところ」直江津。私自身まだまだ勉強中ですが、過去を辿っていくと様々な人がこの直江津を訪れ、このまちに心惹かれ、魅力を感じていたようです。

私が感じたこのまちの魅力を家族や友人、また次代へ語り継いでいきたいなと考えています。そして、そんな人が一人でも増えるよう、これからも微力ながらできることをやっていけたら直江津への恩返しになるのかなと思っています。



みやけりえさん
昭和六三年、石川県能美市生まれ
《日々是好日》をモットーに能美市で伸び伸び育つ
平成二七年春から上越市在住
家族構成は父・母・夫・長男＋メダカ十匹

JAPAN HERITAGE
日本遺産

特集「日本遺産」認定記念

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
～北前船寄港地・船主集落～とは

上越市は平成三〇年五月、文化庁の日本遺産（Japan Heritage）「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」として認定（五月現在で三八市町）された。

「日本遺産」とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するもので、ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる様々な有形・無形の様々な文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけではなく海外にも発信することによって、地域の活性化を図ることを目的としている。

「日本遺産」が考える〈北前船〉とは

日本海や瀬戸内海沿岸には、山を背景にする港町が点々とみられる。港に通じる小路が随所に走り、通りには広大な商家や豪壮な船主屋敷が建っている。社寺には奉納された船の絵馬や模型が残り、京都や寄港地などに起源を持つ祭礼が行われ、節回しの似た民謡が唄われている。これらの港町は、荒波を越え〈動く総合商社〉として巨万の富を生み、各地に繁栄をもたらした北前船の寄港地・船主集落である。そこは、時を重ねて彩られた異空間として今も人々を惹きつけてやまない。

と、きわめて魅力的な文言が散りばめられているが、上越市、―直江津のまちの景観から、〈北前船〉の痕跡をどのように見出すことができるのだろうか。

〈北前船〉とは

近年は〈きたまえぶね〉という呼び方が定着してきたが、〈きたまえせん〉という呼び方が間違いであるとは言えないように、その定義については諸説あって、決定的なものはないようだ。

一般的には、江戸時代から明治時代にかけて北海道・

東北・北陸の日本海沿岸を航行し、関門海峡を経て瀬戸内海の港を目指す廻船のこと（逆の航路もある）と言われている。同じように北の海を航海したから、北海道を往復したからなどとも言われている。

また航海には、幕府や各藩の米や民間の荷主から運賃を取って回漕する〈賃積み〉と、仕入れた商品を船頭の才覚で、各地の港々で売買しながら航行する〈買積み〉という商法がある。上り下り往復で商売ができるので〈のこぎり商法〉といわれ、北前船主たちに巨万の富をもたらし、北前船＝一獲千金というイメージが作り上げられることになった。このような瀬戸内から日本海を〈買積み〉商法で航行する船を〈北前船〉とする説もある。

この航路は、江戸の商人河村瑞賢が酒田から積み出す幕府領の米の大阪回漕を請け負って、寛文一二（一六七二）年に〈西回り航路〉を策定したのが始まりだといわれている。従来の敦賀―陸路―琵琶湖・大津・大阪という経路から、日本海を航行し関門海峡経由大阪直航は、距離は伸びても輸送時間や経費が大幅に削減でき、日本経済を支える大動脈として急速に発達し、米、海産物、酒、衣類、紙、瀬戸内海の塩などの物流が拡大されることになった。

北前船は船型を言うのではなく、瀬戸内海で発達した操船性能が良く船足も早い〈弁財船（べざいせん）〉と呼ばれる帆船が西回り航路に就航していたので、この船型そのものを北前船と総称することもある。しかし、当初この航路の主役であった瀬戸内の回漕業者は、自らの船を〈北前船〉とは呼んでいないということも指摘されている。

操船全体の責任者である船頭のほとんどが日本海を熟知した北陸地方の人たちで、瀬戸内の船主に雇われて日本海を航海し、のちに彼らが船主となり、富を集めて北陸地方に〈北前船の里〉と呼ばれるような船主屋敷が建ち、船主集落が出現するようになった。



酒田市日和山公園に立つ河村瑞賢像



「北前船こども調査団」のプロジェクトで国府小学校の子どもたちが夷浜の米大舟保存会の皆さんから北前船が伝えた「米大舟」を習う

下／子どもたちに出された弁当





湊（港）としての直江の津

直江津は、室町時代に成立した日本最古の海洋法規集である「廻船式目」に、三津七湊のうちの七湊の一つに

〈今町〉として名を連ねている。今町は近世直江津の名称であり、法規の成立について真偽を疑う研究もあるが、時代を経て近世の〈今町〉という表記に至るまで「廻船式目」が機能していたという見方も考えられている。

いずれにしても、国府の湊（津）が訛った〈郷津〉という地名がいまも残るように越後国府の港として、また越後守護上杉氏、上杉謙信・景勝の時代にもその財政を支える港として、手厚く保護されていたことは間違いない事実である。

このような直江津は、中世の物語に「直江の津」あるいは「直江の浦」という名前で登場し、日本の東西海陸の物流・文化の接点として物語が転換する地として描かれているのは、本誌「直江の津」37号〈物語に見える「直江の津」のかたち〉でも考察されいてる。

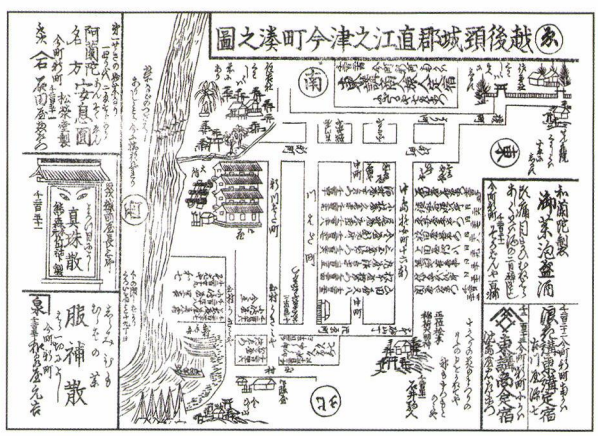
港湾都市として直江津今町から明治の直江津へ

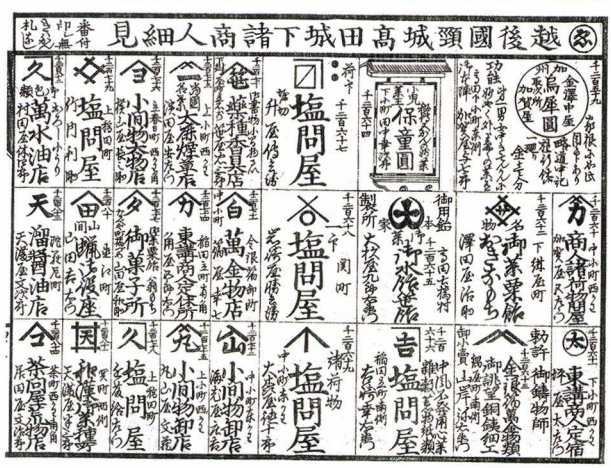
江戸時代には「直江津今町」として、高田藩の外港の機能を担うことになるが、海運による急激な流通経済の発展は、「日本遺産」における「船主集落」ではなく「北前船寄港地」として、藩の外港としてだけではなく信州への交易の窓口、物流基地として多くの廻船問屋や遊郭の出現を見、経済的自立と町衆文化を開花さることになった。

これらの北前船の繁栄は、明治時代に至って汽船や鉄道網の整備、電信の出現で一気に衰退したと言われているが、直江津では、江戸時代から続く、片原町（天王町）を中心とする廻船問屋街が逆に活況を呈していた様子がうかがわれるのは、〈北前船〉の衰退を招いた要因が直江津にとって、逆に有利に働いたのではないか、という「疑問」が浮かんでくる。



高岡市伏木の北前船の秋山家

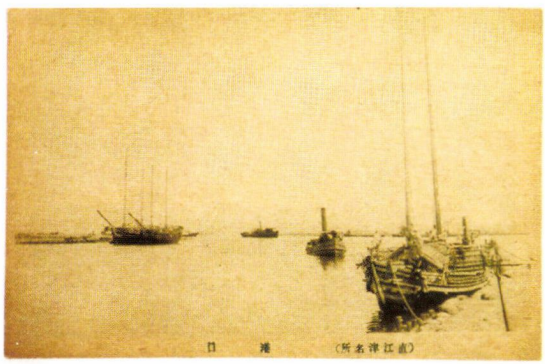



越後國頸城高田城下諸商人細見
塩問屋
塩問屋
塩問屋

右の大きな要因は、明治維新で直江津今町は高田藩のからの自立、城下の各種問屋の拘束からも解放され、廻船問屋の裁量で自由に売買できるようになったことであろう。加えて、汽船の登場は産地直送（航）を可能にし、電信は発注や商品相場の情報を素早く入手できる情報革命を起こした。直江津港は河口での港湾施設が機能できず「目の前がぜんぶ港」と言われるように、近代港湾の時代を迎えても、江戸時代そのままの〈沖がかり〉といわれる沖荷役の港という苦悩の港であったため、荷役に時間がかかり、商品が海岸倉庫で滞留することになったが、それが期せずして、電信を利用した相場のコントロールを可能にしたのも活況の一因といえよう。

そして明治二六年に全通した唯一の列島横断鉄道である信越線で関東一円へ、また長野から篠ノ井線を経由して松本や伊那谷へ物産を一気に輸送できるようになった。

これらの事実は、世情言われている〈北前船〉の衰退の原因とは全く逆で、むしろ直江津における〈北前船〉の時代となったと言っても過言ではないだろう。





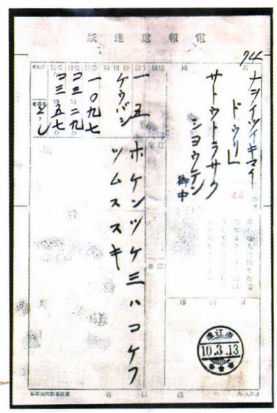
上／和洋の船が混在する直江津河港の絵はがき（明治中期）
下／大正時代の直江津海岸

「何もない」？「北前船のまち」の痕跡

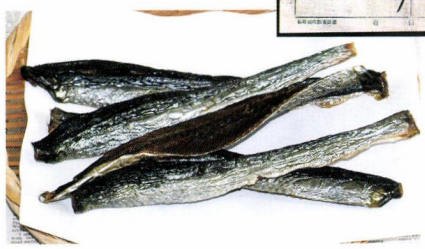
直江津がどのような繁栄ぶりであったのか、史料的にはほとんど未発見か、または残されておらず、「北前船で栄えた直江津今町」というイメージだけが先行している感があるのは否めない。

それではなぜ、北陸に残るような北前船の船主の豪邸のように、目に見える痕跡が残っていないのだろうか。火事が非常に多かったことも大きく影響していると言えよう。江戸時代の記録に残る時代を見ても、ほぼ一〇年に一回大火に見舞われ、文政八（一八二五）から一一（一八二八）年にかけては、連続で大火に見舞われている。それは明治になっても三一（一八九八）年、三九、四〇、四一年と連続で大火があり、まちは壊滅的な被害を受けている。

復興に当たって、物流基地として位置づけられる直江



電報一つで北海道の産地から身欠きにしんや昆布が発送された



〈北前船〉の痕跡を訪ねる

〈北前船〉といえば、まず思い起こされるのが「船絵馬」であろう。上越市は日本遺産の認定にあたって、市内に残されている船絵馬を調査し「船絵馬並びに船模型」として文化財に指定している。

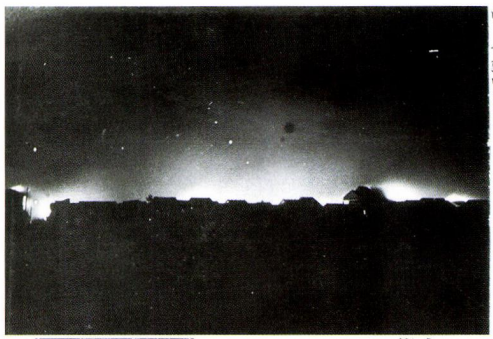
船絵馬とは、航海の安全を祈って寄港地の寺社に奉納されたもので、船名、船主や船頭、国名が書きこまれているので美術的価値だけではなく、交易の歴史を読み取ることができる歴史資料として重要視されている。

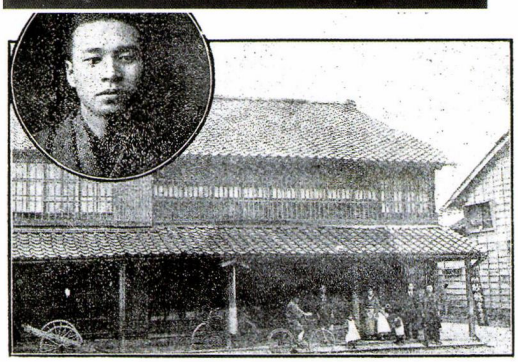
次に船絵馬と船形模型を紹介してみよう。写真とデータ(一部省略と加筆)は上越教育委員会提供。なお、実物は公開されているものではないので、原則拝観は出来ない。



八坂神社　福栄丸

奉納者・沖船頭唯吉郎　作者・吉本善典景映
横 104cm × 縦 77cm



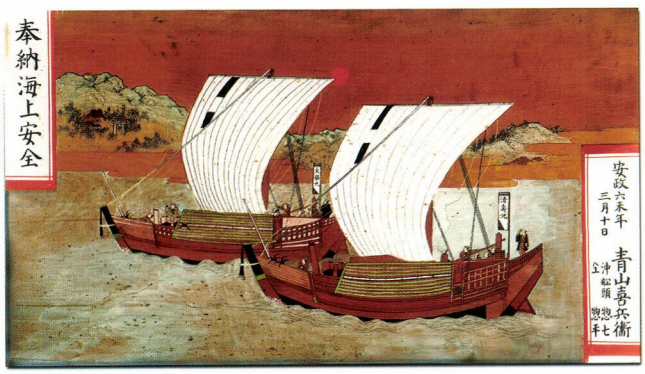


明治 39 年 7 月 11 日午前 1 時過ぎに発生した火災で 1000 軒余が焼失し、下の写真のような商家が多数失われた
翌 40 年・41 年にも連続で大火に見舞われている

津は、時代に即したまちづくりが行われ、明治二二年刊行の「北越商工便覧」に載るような商家の姿が消え、いわゆる豪商の館よりも、機能的な商業施設への変貌が要請されていったのではないだろうか。



イラスト・ひぐちキミヨ



日野宮神社　清寿丸・大乗丸

奉納者・青山喜兵衛　沖船頭惣七　同惣平
安政 6 年 3 月 10 日奉納
横 109cm × 縦 65cm



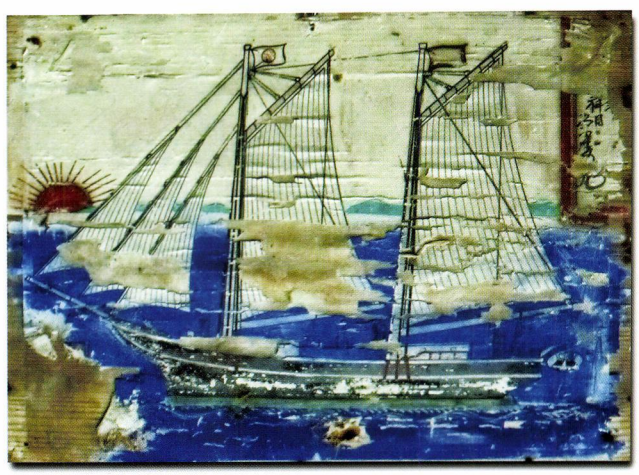
住吉神社　久徳丸

奉納者・船主　橋本トラ子　絵師・絵馬藤
明治 22 年奉納
横 54cm × 縦 36.5cm



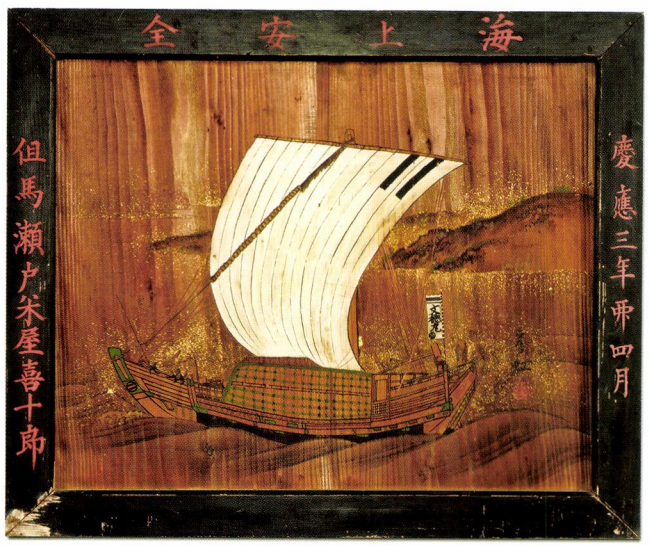
剣神社・諏訪神社・飯縄神社合殿　劔丸

奉納者・伊藤助右衛門手船 船長伊藤助五郎
能生の伊藤家は越後屈指の船主であり、冬期間は郷津に船を囲っていた
全長 125cm × 高さ 45cm × 幅 34cm



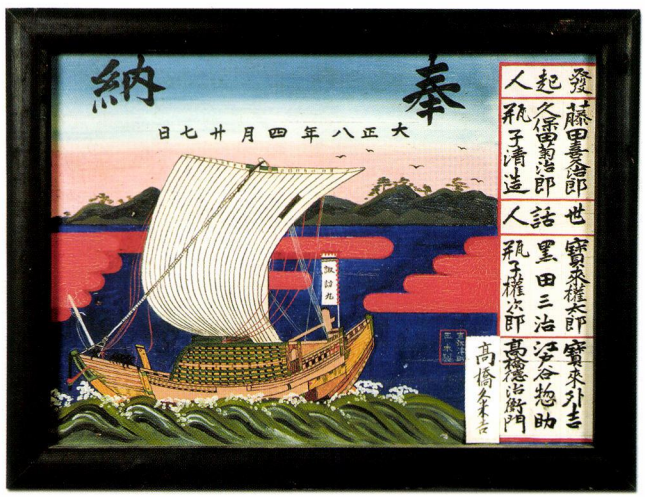
剣神社・諏訪神社・飯縄神社合殿（虫生岩戸）
栄寿丸

明治 10 年奉納
全長 49cm × 高さ 40cm



泉蔵院　文徳丸

奉納者・但馬瀬戸（兵庫県豊岡市）米屋喜十郎
慶応３年４月奉納
横 82.5cm × 縦 67.5cm



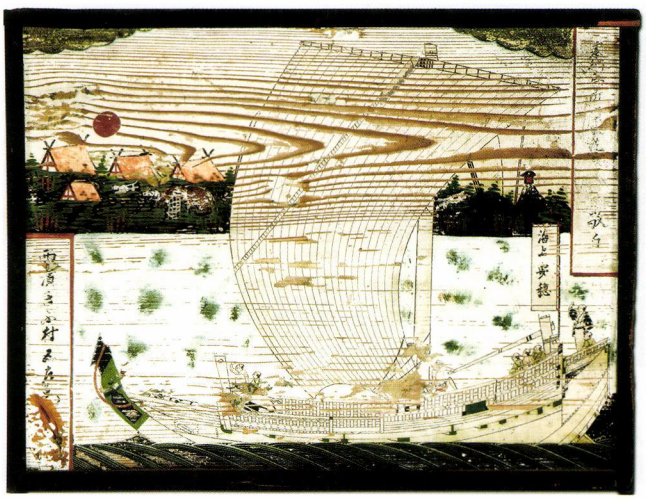
諏訪神社（有間川）　諏訪丸

奉納者・発起人高橋喜久治郎ほか　絵師・直江津玉木製
大正８年奉納
横約 90cm × 縦約 70cm



明静院（岩殿山）　文久丸

奉納者・直江津今町□□何某
文久３年奉納
横 96cm × 縦 75cm



泉蔵院　船名不詳

奉納者・西濱きふ（鬼舞）村 五左衛門
73cm × 縦 56cm

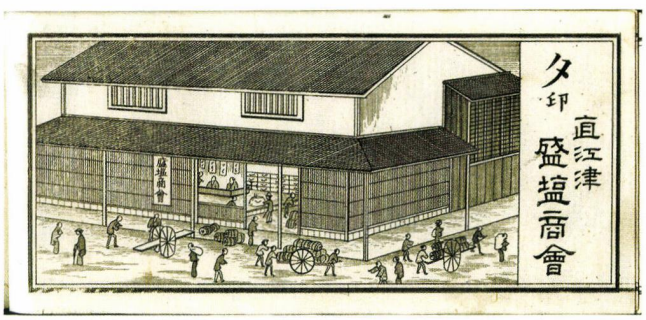
商工案内や刷り物に見る

明治から昭和初期にかけて、多くの商工案内やその他の印刷物が発行されたきた。その中から「北越商工便覧」と「引き札」から明治の北前船の時代を想像してみようと思う。

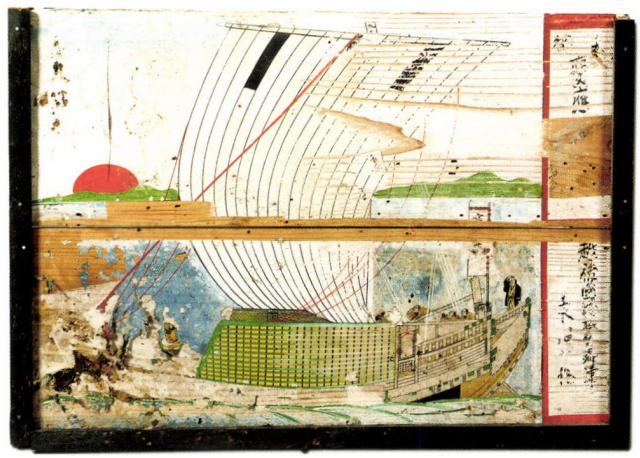
明治22年に刊行された商業案内「北越商工便覧」には直江津では商家28軒、旅館4軒、五智地区の料理旅館など9軒が掲載されている（ただし広告掲載と思われるので、もっとあるはず）。多少パターン化されてはいるが、当時の写真と見比べてみてもそれほどの違いがないので、掲載された銅版画の姿の商家が並んでいたものと思われる。

引き札は明治時代に盛んに発行されたもので、年始に益々の取引繁盛を願って取引先に贈られたものである。

各地に残された引き札によって取引の範囲が浮き上がってくる。年始に贈られため、暦が刷り込まれたものも多い。意外にも上越には受け取ったものがあまり見当たらない。

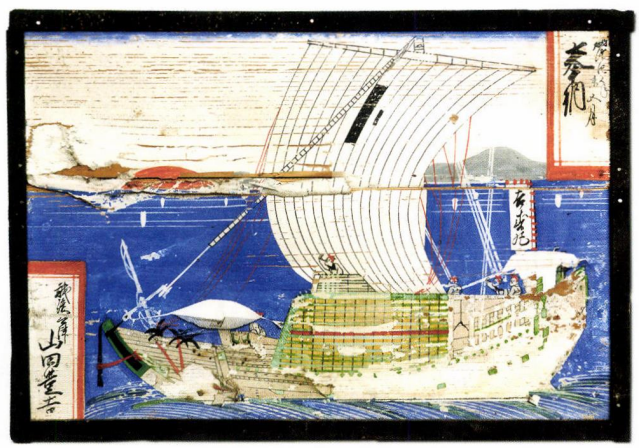


盛塩会社
琴平神社には盛塩会社が奉納した石灯籠がある



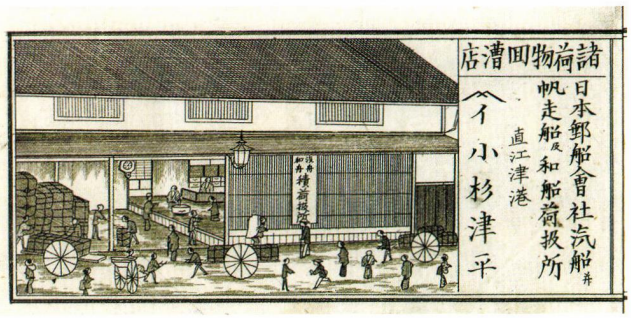
明静院（岩殿山）　船名不詳

奉納者・越後国□□□郷津□□□
慶応1年奉納
横58cm × 縦40cm



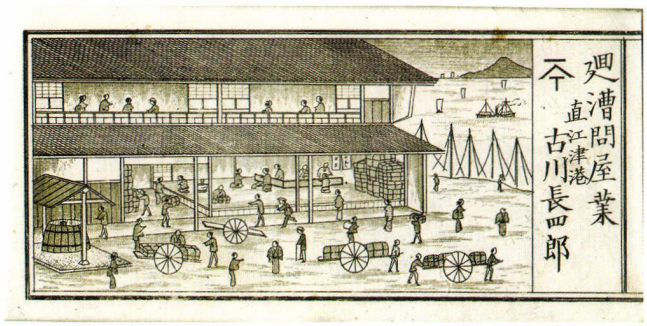
明静院（岩殿山）　吉寿丸

奉納者・越後□津山田豊吉
明治4年奉納
横58cm × 縦40cm

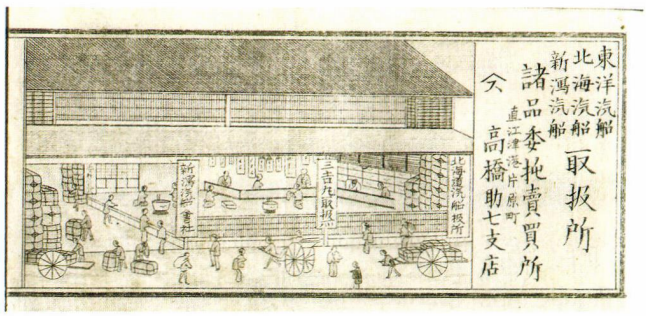




小杉津平
引き札は高岡市伏木の秋山家にもたらされたもの



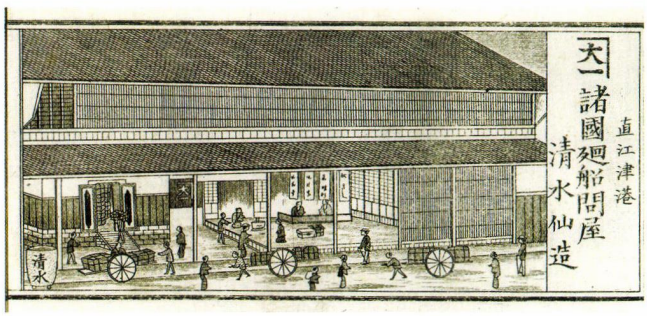
古川長四郎
直江津の有力者で佐渡汽船の創業に尽力

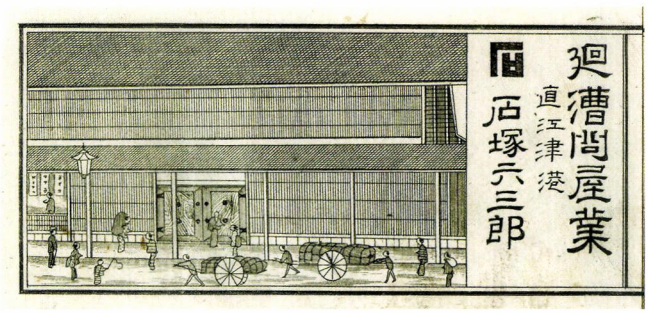


高橋助七支店
新潟の高助の支店として直江津に進出
今も「高助」として親しまれている

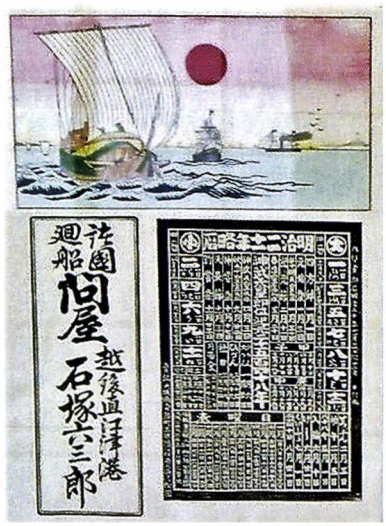


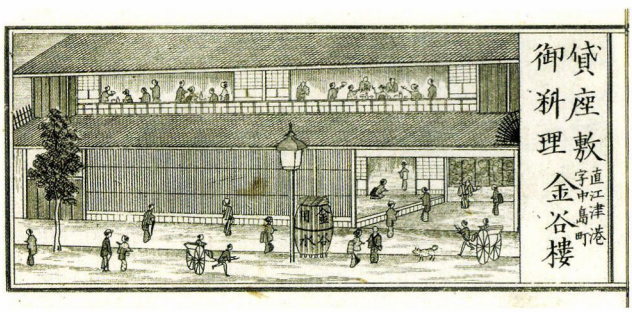
清水仙造
兵庫県豊岡市住吉屋に贈られたもの（住吉屋資料館）



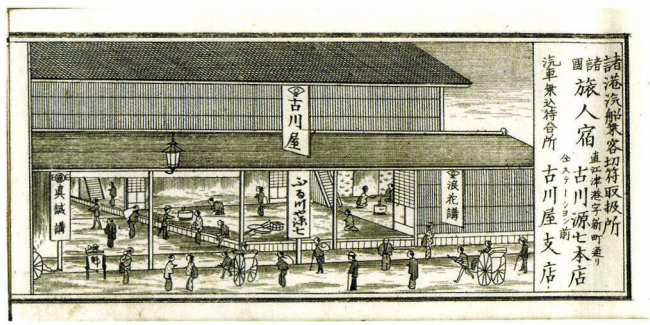


石塚六三郎
直江津屈指の廻船問屋　高岡市伏木の秋山家に贈られたもの

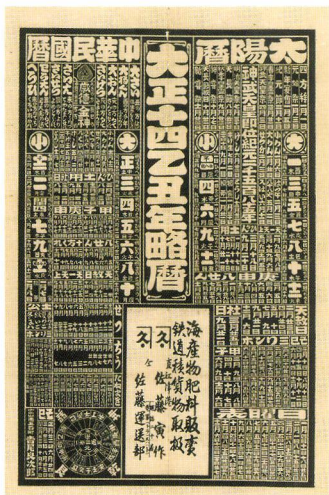




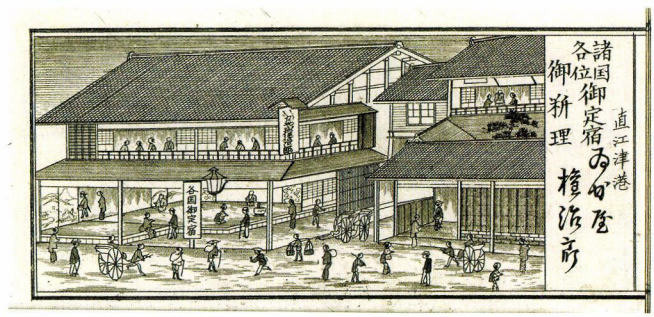
金谷樓
繁栄を極めた中島遊郭の一軒



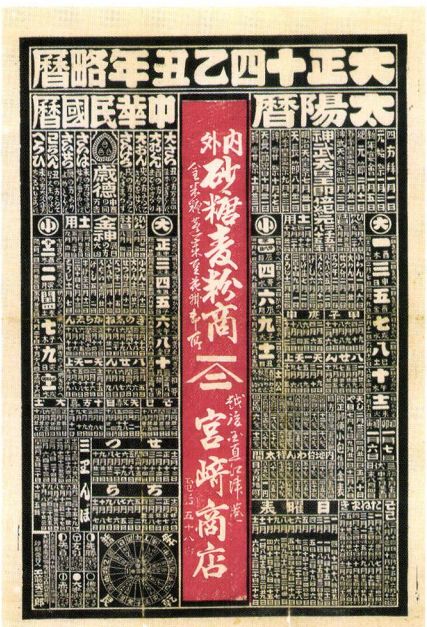
古川屋源七支店・古川屋支店
駅前にあった古川屋旅館の前身



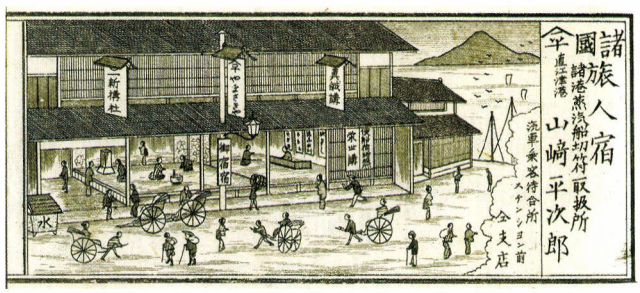
佐藤寅作商店「かねきゅうぼし」
大正14年　地元に残ったもの



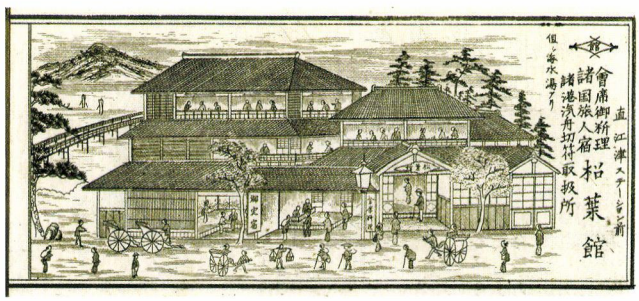
ゐか屋　権治郎
いかや・ホテルセンチュリーイカヤの前身



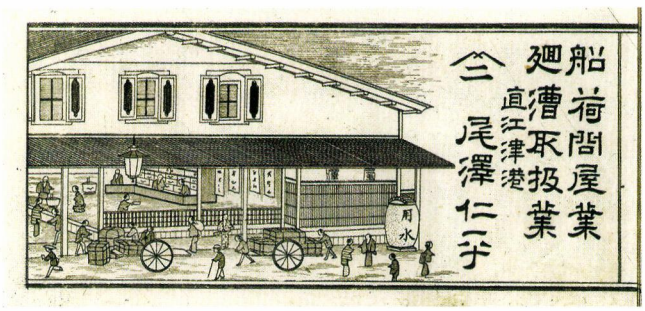
宮崎商店
「宮崎お茶さん」として親しまれた
大正 14 年　地元に残ったもの



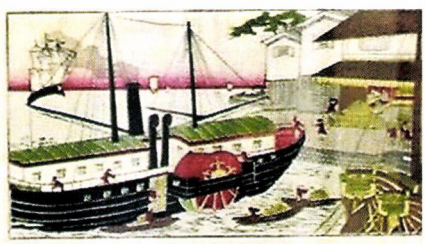
山崎屋平次郎
山崎屋・ハイマートの前身



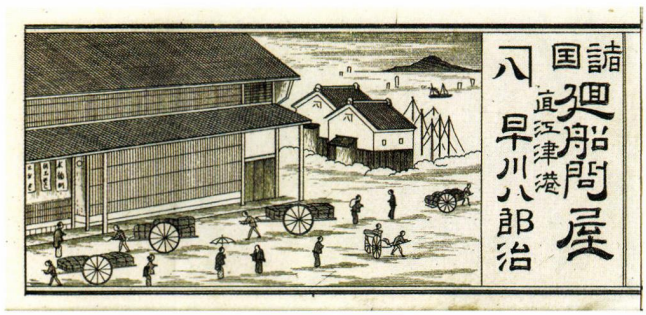
松葉館
駅前にあった旅館

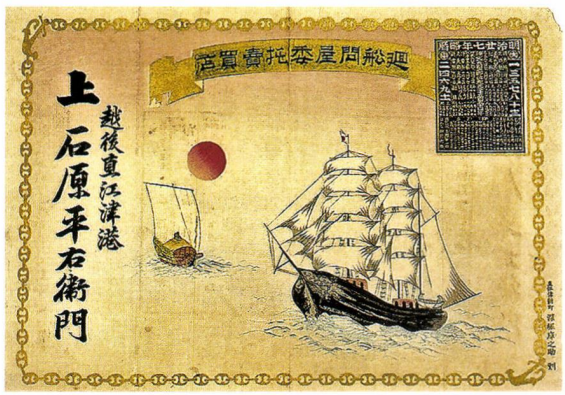


尾澤仁平
石川県加賀市酒谷家 (北前船の里) に贈られたもの











石原平右衛門
兵庫県豊岡市住吉屋に贈られたもの（住吉屋資料館）
印刷は現・深堀印刷



早川八郎治
石川県加賀市酒谷家（北前船の里）に贈られたもの



神明宮（八坂神社境内）
直江津の海運の繁栄を物語る数々の奉納品で護持されている

石造品を訪ねる

笏谷石は福井市の足羽山の笏谷から採掘された緑色の石。約 1,600 万年前の火山の火砕流に含まれた火山岩や灰によってできた火山礫凝灰岩。笏谷石は緑色凝灰岩（グリーン・タフ）と呼ばれるものである。濡れると美しい緑色になるので珍重された。

直江津を中心とした地域で見ることが出来る。北前船のバラストとして運ばれたとされているが、注文した製品として運ばれたものや北前船の時代以前にもたらされた製品も多い。

そして北前船で運ばれたものと言われている石に、市内の庭でよく見かける緑色に白い縞が入った「青石」と呼ばれているものがある。これは群馬県富岡市の三波石峡に発し、中央構造線に沿って九州の佐賀関半島まで伸びている三波川変成体から産出する石で、産地によって、伊勢・紀州・阿波・伊予青石と呼ばれ、庭石などに使われている。

また、神社の境内には航海の安全を祈るために、鳥居や灯籠などの石造品が奉納されていて、交易の歴史を見ることができる。



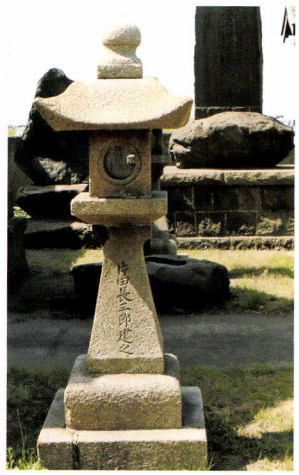
居多神社北参道の笏谷石の鳥居
笠石が破損して別物になっている
笠石は転用されている



真行寺経蔵
見事な笏谷石の土台と階段



墓碑
五智国分寺歴代住職の
墓所内



金毘羅神社
片田長三郎が安政四年（一八五六）三月に奉納
片田家は江戸時代から繁栄した廻船問屋



泉蔵院
山門前の左右にある六地蔵のうちの三体



住吉神社
寛政３年（1791）に大阪・阿波の藍商人が寄進



市内の庭に残る青石



御館公園の関東管領の碑
富岡市の三波石

（取材・文責　佐藤和夫）

国府――春日山――府中――直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中 7

――笏谷石を求めて――

小島幸雄

町を見る材料はどこにでも

先号は笏谷石紀行とも言えるような、筆者の笏谷石探訪記を載せた。久しぶりで福井を走りながら、いつ頃から大量輸出が始まるのだろうという疑問がわいていた。本号で笏谷石を扱うと、実に三回連続で越前の青い石を素材としてまちを見ていくことになる。

まちを見るための素材は何でもいい、極端ない言い方をすればそのように考えている。もっと踏み込んだ言い方をすれば、目の前にあるものに興味を示す、ここからまちを見ることが始まるのだろうと思っている。私は看板が好きだ。「看板ウォッチャー」を自称してはばからない私は、まちの看板にそのまちの根源を見て取れると信じているのだ。

ここ数年ほどは笏谷石のとりこになっている。笏谷石そのものは春日山や高田城の発掘調査で出土するので承知していたし、上越に来て五智国分寺の石塔を知ってからずっと追いかけていた。しかし、これまでの笏谷石に対する思いと少し変わってきた。御影石とともに考えることで、大げさに言えば直江津の歴史が見えてくるのではなかろうか、そんなことが考えられるようになってきた。今回は、交通の要衝とされてきた直江津の地理的な問題を、笏谷石と御影石から読み解こうと思う。

笏谷石研究会

今年のテーマはこれに尽きる。佐藤和夫氏（まちおこし直江津）を誘い、中西聰氏（上越市学芸員）を巻き込んで、研究会の実体はないものの各自が独自の視点で石集めを楽しんでいる。先号でも書いたように、あるときは不審者に間違われながらも青い石を捜し求めているのだ。今年のメインは、お盆に行われた板倉区針の三十三観音の御開帳であろう。三三年に一回行われる御開帳にめぐり合えたのは幸せだった。上越地区でこれほどまとまって笏谷石の製品が見られるところは少ないので、三三年おきの御開帳で守られていくと期待できる。私はお会いできないだろうが。

ところで、今年の笏谷石探求は府中八幡宮の鳥居から始まった、といってよい。佐藤氏が突っつき、私も突っつき、二人が別々に同じ場所で同じ笏谷石と格闘していたとは、今思い出しても愉快でならない。正保二年（一六四五）の年号が刻まれた鳥居は、この地域の笏谷石を紐解く定点となるものと期待している。

珠洲焼と越前焼

私は、春日山城跡の発掘調査にかかわった関係で、少しばかり中世の陶磁器をかじることになった。春日山の発掘では、国産の中世陶器といえば越前焼、瀬戸・美濃焼、が主体で、安土桃山時代、春日山では最終末の時期に唐津焼が急増することが分かっている。あるとき石川県の吉岡康暢先生から「小島さん、春日山ではいつ頃珠洲焼がなくなるか分かる?」と尋ねられたことがある。春日山の発掘では出土する大型陶器の大半が越前焼だったので、「残念ですが、春日山城では珠洲焼から越前焼へ替わっていく時期は分かりません」とお答えした。しかし、その問い掛けはずっと頭の片隅に残り、平成四年に至ってその答えが出ることになる。

直江津駅南の発掘調査は平成四年に始まった。調査の結果、越後府中の中核と考えられる守護所の跡らしき館が検出された。一辺が二百六十メートルに及ぶ堀で囲まれた館からは十五世紀前半の珠洲焼が大量出土するとともに、今まで見たこともない中国製の陶磁器が出土したのだ。越前焼ももちろん出土するが大半が珠洲焼で、春日山城とは様相が明らかに異なっていた。

いま、筆者は越後府中における珠洲焼から越前焼への大型陶器の需要の変化を、焼き物そのものではなく運ぶ主体者、船に求めようと思ったことを申し上げている。能登半島を無寄港で航行できる船の就航が、越前焼の積出港である三国湊から一気に能登国府の七尾や越中国府の伏木（高岡）、そして越後府中（直江の津）まで荷物を運ぶようになったのであろう。その一つが越前焼だったのだ。焼き物一つを取ってみても、日本海を航行した船の積荷に思いをはせることができる。

三国湊から越中や越後（直江津）まで直接航行できるようになったとすれば、三国湊のある九頭竜川支流足羽川沿いの足羽山で採掘された笏谷石が持ち込まれたとしてもなんら不思議はない。越前焼と笏谷石はセットとは



府中八幡宮の拝殿の下に保管されている笏谷石の鳥居の転び（柱）と笠木





上／「海上がり」の珠洲焼、貝が付着している

下／伝至徳寺跡出土越前焼大甕（上越市埋蔵文化財センター）

言えないまでも、同じ湊からの船荷として運ばれたことは想像に難くない。そして、その船の変化を十五世紀中ごろではないかと考えている。

日本遺産、そして重要文化財

さて、今年五月、上越市が日本遺産の一つ「荒海を超えた男たちの夢がつむいだ異空間〜北前船寄港地・船主集落〜」に認定された。その後一〇月には糸魚川市（旧能生町）鬼舞の伊藤家住宅を重要文化財に指定するよう、文化審議会の答申が出されている。私事ながら、先輩の寺崎裕助氏の生家であり、たびたびお邪魔させていただいた建物が重要文化財になったことは本当に嬉しい。長年文化財を担当して重要文化財の指定にも携わってきたが、今回の答申は事務手続きを行ったこれまでの指定とは一味違った感慨を持って答申を聞いた。

本誌三九号（二〇一七・六）に〈「北前船」のまちを巡るという〉特集が掲載されていたことを記憶されている方も多いと思う。伏木（富山県高岡市）、新湊・放生津（富山県射水市）、岩瀬（富山県富山市）のまちに残る、廻船を知るさまざまな資料が紹介されていた。その一年後に日本遺産として認定されたのだから、それを見据えていたようで心地好い感覚を覚えた。

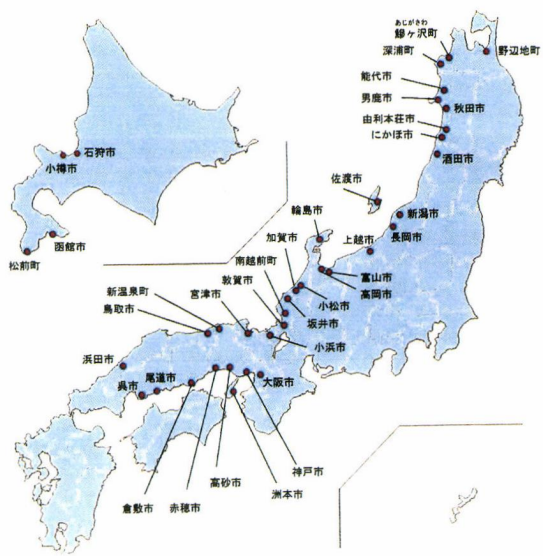
五智築港の話

前出の佐藤氏は講演で〈五智に港を造ろうとしたことがあった〉と話されることがある。風待ち湊であった郷津から砂丘を掘り割り、五智地区の団地化されているあたりを港にしようと計画したというものである。話だけ聞いていると無謀とも取れる計画だが、各地の港湾を見ているとけっして無理難題を突きつけていたようにも思えない。ただし、計画に終わったのだからどこかに無理があったことは事実であろう。

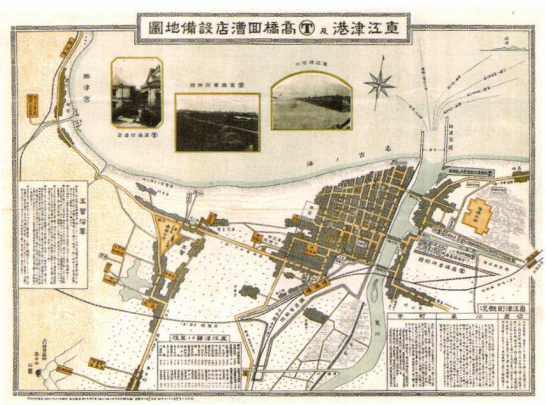
ところで、このことをヒントに直江の津という府中の港を考えてみよう。



伝至徳寺跡出土の中国船載青磁



平成30年認定の北前船関連「日本遺産」38の自治体



大正12年　高橋回漕店発行の直江津案内地図

春日山城下の形成

春日山城は、山城の裾野に延長一二〇〇メートルに及ぶ堀と土塁を築いて総構を造っている、全国で稀な山城として知られている。監物堀と称される堀は、その名から上杉景勝に替わって越前北ノ庄から春日山に入った堀久太郎秀治の家老、堀監物によって築かれたと考えられてきた。しかし、堀氏は慶長三年（一五九八）に春日山に入った二年後、同五年（一六〇〇）には福島築城を計画したとされていて、大規模な城の改修を企てるには無理がある。ましてや、堀氏は四五万石の大名とはいうもののその石高は越後各地に配置された与力大名の所領も含まれていて、堀氏の自質的な石高は三万五千石だったというのだ。このような事情からすると、総構は景勝が計画したと考えるのが妥当と思われる。

さて、監物堀は御館川を挟んで北と南では大きく様相を変えている。北は何度も折れ曲がりながら築かれているのに対し、南側は直線的で埋蔵文化財センターから大豆までは斜めになっている。この斜めの部分は正善寺川の旧流路と考えられ、今の正善寺川は岩木から藤新田に向けて人工的に掘られたと理解できる。



越後春日山古城図
天保７年（1836）（春日山神社蔵）

このような春日山城下の形成過程を考えると、城下は氾濫や洪水といった水害からは守られたであろうが、下流の五智地区には水が供給されなくなったということになる。正善寺川の水が五智に流れていれば、あながち湊の構築も夢ではなかったのかもしれないのだ。

長峰城にあった船着場

今年は牧野氏が長岡に入って四百年という節目の年であったという。一昨年に牧野氏の城があった吉川区の長峰城を訪れたときに注目したのは、船着場という場所が残っていると聞かされたことであった。今でも長峰池に面したその場所に、どんな船をつけたのかを知る由もないが、砂丘の後背地に満々と水をたたえた潟湖を行き交う船を想像した。

松平忠輝の高田築城は慶長十九年（一六一四）で牧野氏が長峰城に入った元和二年（一六一六）の二年前である。忠輝が福島城主になったのは慶長十五年（一六一五）であるから、福島城を廃した忠輝が福島の周辺をどのように再利用しようとしたか興味のわくところである。

筆者は、忠輝が福島城を廃した理由を水害に求めるべきだと指摘してきた。福島城の水害は、城の周りの城下が被ることになり、町民が一番の被害者になる。それに対して高田城下町を見ると、町屋が高田城下町で最も高い位置にあり、武家屋敷から城へと標高を下げていくことが見て取れる。町屋が水害を被ることはないのである。高田城を取り囲むように流路を変えた青田川の東側



上杉景勝が豊臣秀吉のために描かせた「越後国絵図」で左上が大潟の潟湖で右端が関川（「大潟町史」より）

には土塁が築かれ、青田川が氾濫しないように配慮されているのも、城が標高を下げていることの証である。高田築城は、忠輝が行った城下の危機管の徹底による城の移築といってよい。城下が疲弊することは、領主にとって最も回避すべきことであったのではなかろうか。推測を重ねれば、忠輝の高田築城と福島廃城は砂丘の後輩湿地の潟湖を利用して湊を造ることだったと考えるのは乱暴であろうか。上杉氏が制作した越後国絵図では大潟が描かれ、そこから関川までは湿地帯の様相が描写されている。その湿地帯が湊として利用できたら、風待ちと運河を持つ良港となっていたことは容易に推測できるのである。こんなことを考えるのは私だけだろうか。

私は昭和五十年代の中ごろ、新潟県教育委員会の調査をお手伝いして、当時の頸城村を歩いたことがある。遺跡なんてないだろう、と思っていた水田地帯に線上にのびる微高地があった。そこでは、平安時代以降の遺跡が帯状に、次々と確認されたことを記憶している。この遺跡地帯の堰堤が無く、大潟がもっと関川近くに存在していたら潟湖の湊ができていた、などと妄想しているのである。後でも述べるように、関川水系は傾斜がきつく大量の土砂を流すために、毎年河口が塞がれてしまうことで、潟湖の湊は造れなかったのであろう。

船絵馬のこと

今回の日本遺産の認定のストーリーを構成する文化財の一つに「船絵馬」がある。北前船の船主たちが航海の安全を祈願して寺社に奉納したもので、海を航行する船の姿が描かれている。文化財の名称としては「船絵馬並びに船模型」、いずれも歴史資料とされている。

このうち船模型は、重要文化財に指定するよう答申があった伊藤家が奉納したものである。船模型の伊藤助右衛門と伊藤助五郎について伊藤家の現当主克助氏に事情をお聞きした際、鬼舞では冬期間船の係留ができないので郷津に置いていた、と話された。船模型は係留中の船が安全に冬を越せるように奉納されたものであろう。船の模型は新造したときに作るものであったということで、富山市岩瀬の森家にも展示されている。

ここで少し船絵馬を観察してみよう

まず、住吉神社のものである（9ページ右上の写真）。背景から見てみると、右に太陽が描かれ、左に行くにしたがって山並みが高度を増すように描かれる。船上には船尾に羽織をまとった人物が描かれるのは船主を表現しているものであろうか、帆の下には遠方を眺めるようなしぐさの人物がいて船頭と思われる。「絵馬藤」とあるのは、大阪の絵馬師ということである。明治三年以降落款を入れるようになったとされている。

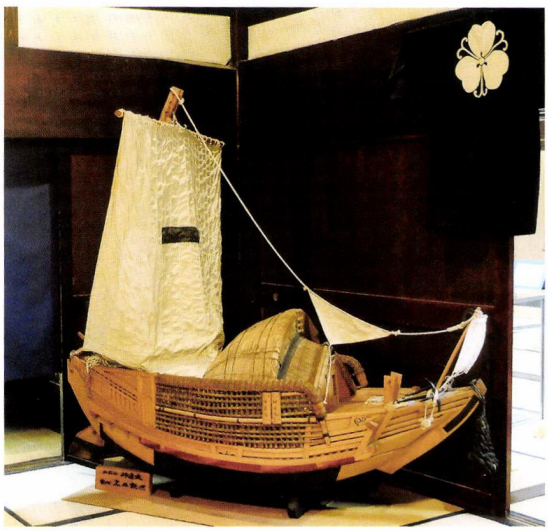
次に、日野宮神社の絵馬である（9ページ左上の写真）。二艘が描かれ、背景の左に神社があり右に行くにしたがって山並みが標高を下げて海に至る。太陽は中央に描かれている。船上の人物は細かな差は認められるが、船尾に立つ羽織の人物と船首の遠望する人物は同じで、大きく差があるのは帆に描かれる黒く塗りつぶされた部分くらいである。

もう一点見てみよう。剣神社・諏訪神社・飯綱神社合殿所蔵の絵馬で、洋式の船型を持つ帆船である（9ページ右下の写真）。絵を見る限り汽船ではないようであるが、後部のマスト下から船尾が見えないのが残念である。背景は左に太陽を描き右に進むに従って高度を上げる山並み、青く描かれる海など絵馬藤型の船絵馬と酷似する。さらに奉納者の枠の描き方も同じであることから、前の二点と比較してみると住吉神社のそれに非常に良く似ていることが分かる。船型はともかく、背景がまさに瓜二つなのである。二枚の違いは、船型と帆の黒塗りの部分の違いくらいということになる。

このように見てくると、「絵馬藤（えまふじ）」というブランドが明治以降に爆発的に絵馬の世界を席捲したということなので、明静院のそれも同じ絵馬師になるものかもしれない。

ところで、もう一点掲載した写真は、富山市岩瀬の森家に展示されていたもので、これにも絵馬藤の銘が書かれていた。年号の記載はないが、明治三年以降に落款が一般化するということなので、この絵馬もそれ以降と考えられる。また、同じ絵馬が福井県立歴史博物館にも展示されていた。相当多くが残っているのだろう。

このように見てくると、絵馬藤に焦点を当てただけでも多くの絵馬が残されていることに気づく。これから考えると、大阪に入った船が当時の絵馬藤ブランドの絵馬を買い込み、航海中に寄港した湊の寺社に安全祈願したと考えればいいのだと思う。絵馬がいくらのものだったのかは知らないが、それらをたくさん買い込み寺社に祈



富山市岩瀬の北前船の豪商森家に飾られている北前船の模型「明神丸」



軸装された森家の船絵馬「清正丸」には「絵馬藤」の落款も見える





富山県伏木の港金比羅神社の狛犬の台座に残る「直江津丸」の名前
狛犬は失われたためか平成６年に廣田石油と日本海タンカーが新たに寄進したもの

願することが目的であり、それほど航海は危険なものであったとすべきなのかもしれない。

なお、本年十二月一日に学びの交流館で行った座談会に参加された住吉神社の関係者の方から教育委員会に、神社で船模型が保存されているとの情報がもたらされたという。日本遺産に認定された上越市で新資料が増えることはまことに喜ばしいことで、座談会を機に情報がもたらされたことも嬉しく思っている。

今年後半に見た笏谷石

福井県の笏谷石紀行は前号に載せたが、その後も富山から福井に行く機会があったので、ついつい笏谷石の痕跡を探してみた。

まずは越中国府の湊、伏木を訪ねたときのことである。バスで国府研究の集まりに参加された方々を案内して目的地に到着した。そこで目に飛び込んできたのは、道路を挟んで向かいに鎮座している神社であった。とりあえず皆さんを会場の建物へ誘導し、小生はわくわくした気持ちで道路を横断して神社へと走った。あるではないか。そこにあったのは狛犬を乗せた台座に使われていた青い石、まさに笏谷石が私を迎えてくれたのだ。



滑川の樂原神社
文化２（1805）年 越前の石工
井上市右衛門作という

青い石だけでは終わらなかった。その石に刻まれていた文字を見てまたまた頬が緩んでくるのが分かった。そこに刻まれていた文字は、

汽船直江津丸船長
　水越藤吉
（一人おいて）
汽船直江津丸機関手
　荒木芳松

というものであった。うれしさのあまり早速佐藤氏にこのことをお伝えしたところ、「汽船直江津丸」なる船の詳細を調べていただいた。私は石を探せるがそこから追求する姿勢に欠けるので、佐藤氏の根気の良さには日ごろから敬意を払っているのである。そして、佐藤氏から頂いた年号はもちろん明治というものであったことは、読者の推測のとおりである。

もう一つ、富山で見つけた笏谷石を紹介しよう。

富山市の神通川河口にある岩瀬に行こうとして車を走

らせていたとき、ふと思い立って滑川インターチェンジで降りて海岸線に向かった。滑川市役所を過ぎたところで左折して、ふと右手に何か私を引き寄せるような一種異様な気配を感じた。その場を過ぎて西に向かってもその思いは増幅するので、行き過ぎていた道ではなくもう一本海よりの道に出て少し東に戻った。

しばらく戻って見たのは大きな神社だった。式内社樂原神社（いちはらじんじゃ）という。なかなか大きな神社であった。鳥居から車が入りそうなので入ろうとしたとたん、目に飛び込んできたのは紛れもない笏谷石の狛犬であった。文化二年（一八〇五）に奉納されたもので、とても美麗な狛犬で、笏谷石製の狛犬としては筆者が見た中でも飛びぬけて美麗なものといって過言ではない。

住宅にも使われた笏谷石

写真は、五智国分寺の経蔵である。この建物は元禄期に建築されたことが分かっていて、江戸中期までさかのぼる貴重な建造物である。この建物の基礎が笏谷石なのだが、ここでは一度、寺社にあるものから離れて、私たちの近辺にある笏谷石を見ていこう。

滑川を経由して行きたかったのは富山の岩瀬であり、廻船問屋の森家住宅を見学することだった。そして最も興味があったのは、住宅の基礎などに笏谷石がどのように利用されているかということだった。

インターネットで閲覧した「ふくい笏谷石の会」という団体のＨＰに「笏谷石を訪ねて～一五〇〇年の歴史と文化を再発見・ふくい～」というものがある。その中に笏谷石が利用されていた時代を四つにわけて、最後を庶民文化時代と名づけているものを見つけた。





富山県岩瀬森家の玄関の笏谷石の敷石と店構え



五智国分寺経蔵

土蔵の戸前に装飾的に施された笏谷石



江戸時代後期以降現在に至るまで、笏谷石は私たちの生活の中に生き続けてきた。その最も頻度が高い使われ方は、住宅の目立つ場所、ひとつには建物（塀を含む）の基礎であり、玄関周りの縁石、靴脱ぎ石などというものであった。これらを見ると隠れたところに使用されるものはなく、その家の見え易い、あるいは見せる場所に使われたことが分かる。今回見学した森家の玄関先の縁石も笏谷石であったし、中庭にはそれこそ各地の銘石が所狭しと並んでいたのである。笏谷石に限らず、廻船を営んだ家には各地の銘石が集められ、当主たちがそれぞれ集めた石の自慢合戦をしていたであろうことは容易に推測できそうである。

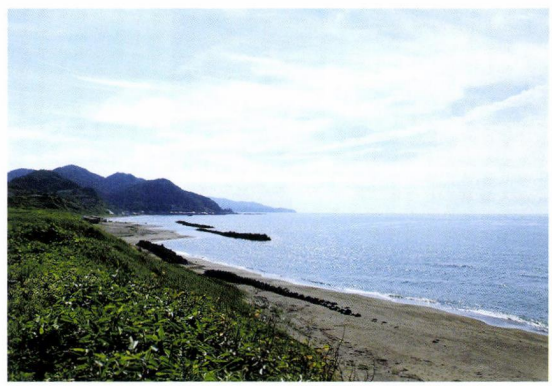
北海道江差の中村家（明治二二年ころの建築）を訪れたとき、建物の基礎がすべて緑色であったことを思い出す。一つではそれほど目立たないが、たくさん並べて見せる設え、これが笏谷石の真骨頂といえるのではないだろうか。



満々と水をたたえる小矢部川の河口　伏木・新湊を繋ぐ渡し船は、伏木万葉大橋の完成によって廃止された



関川河口
冬期間北西風による砂の堆積を防いだ巨大な蛇篭が引き上げられている



風待ち湊〝郷津湾〟
宝暦高田地震（1751）までは、岬の 1km先「二つ岩」まで陸が続いていた

湊	河川港・風待ち湊	河川名	幹線延長 (km)	流域面積 (km)	標高 10 m までの距離 (km)
三　国	河　川	九頭竜川	116	2,930	26
伏　木	河　川	小矢部川	68	667	19
岩　瀬（富山）	河　川	神通川	120	2,720	15
今　町	風待ち	関川	64	1,140	8
新　潟	河　川	信濃川	367	9,719	60
酒　田	河　川	最上川	229	7,040	23

風待ち湊と河口湊

前ページの表は、国土交通省のHPからデータを拾い出し、笏谷石に関わりの深い湊で川の延長と集水面積を比較してみたものである。直江津は関川の河口に開けたまちであり、それを基準として比較を試みたところ、類似するのは小矢部川を利用した越中国府の湊、富山県の伏木湊だった。

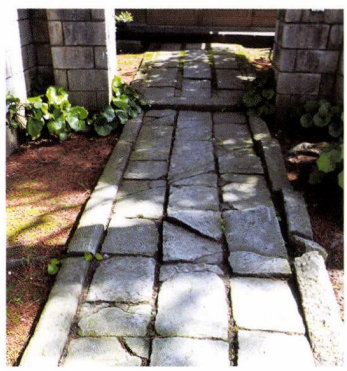
表に示したように、関川と小矢部川は延長がほぼ同じであるが、集水面積は関川が約二倍の面積となっている。両河川の比較にならない差は、小矢部川の周辺の山々がせいぜい三百メートルであるのに対し、関川は二千メートル以上の山が控えている。このことは関川が小矢部川に対して非常に急流であることを示していて、土砂の流出量は比較にならないほどであろう。

その他の河川とも比較して見よう。前ページの表に示した河川の周辺が、河口から標高一〇メートルに到達する地点を調べて地図上で測ったものである。これはあくまでも地図上の数値であり、目安に過ぎないのであらかじめご承知おき頂きたいが、それでも急流であることを示すには十分だと思えるのだ。

小矢部川と関川の決定的な違いがもう一つある。高岡市は能登半島が西にあって、それが屏風の効果を生むため北西の季節風が直接海岸線を襲っても直江津とは比較にならないほど少ないのは明らかである。それに比べて、直接北西の風を受ける直江津は河口に砂が押し寄せて塞ぎ、毎年大変な労力で河口の浚渫を余儀なくされたというのである。

しかし、それでも国府の津（国府津＝郷津）となりえたのは、郷津が風待ち湊として十分な機能を果たしたからに他ならない。「上越市史通史篇4近世二」によれば文政十一年（一八二八）の冬に郷津で冬越しした船は四〇艘にのぼり、そのうち九艘が伊藤家のある鬼舞村の船であったと記録されている。





享保6（1721）年に建てられた八坂神社社殿の土台石と社務所の敷石、いずれも笏谷石



八坂神社の参道に敷き詰められた御影石



三津七湊の湊（「なおえつものがたり・かたち編／まちおこし直江津」より）

直江津が良好とはいえない関川の河口近くに造られた湊でありながら中世～近世～近代を通じて日本海航路の一翼を担ってきたのは、ほかでもない郷津の風待ち湊の存在だったのである。明治時代の絵図や写真は沖荷役と陸で運ぶ人たちを描き、そして写している。それも郷津があってこその風景だったのである。

主役となった御影石

最後に御影石について触れておこう。

笏谷石とは違い、御影石は今の私たちの生活にべったりと寄り添うと言おうか、切っても切り離せないほどの関係である。家の周り、いろんな建物の門柱や玄関、建築物など、使用されている場所を見て歩いたら時間がいくらあっても足りない。御影石を見ない日はないのである。今回は、八坂神社と泉蔵院に行って見てみよう。

八坂神社の拝殿の基壇の周りの石は、笏谷石であることは前号でも書いているので、記憶されている方も多いのではなかろうか。しかし、八坂神社に行かれた方の多くは、駅前通から続く参道にある大きな鳥居と石敷きが御影石であることを記憶され、というよりも御影石の存在に圧倒されて笏谷石の存在を思い出していただけるかはなはだ疑問である。佐藤氏によれば、参道が開かれたのが明治三七年頃、鳥居の建造が明治四一年、参道の石が敷かれた年代は写真資料などにより、昭和三年頃ということなので、年代の新しさを指摘できる。


泉蔵院の境内を囲む寄進者の名前が刻まれた御影石（大正 10 年）

泉蔵院は、八坂神社に隣接する上越では数少ない真言宗の寺院で、前号でも笏谷石を紹介した。門前の六地蔵はとても美しい作品で、六体揃って無傷であることは稀有な存在である。山門を入って左側にもたくさんの小像が安置されている。しかし、泉蔵院も八坂神社と同様、石の主役は御影石なのである。八坂神社と隔てる道路を渡り境内の入り口にある閻魔大王のお堂を過ぎると御影石の寄進者の石塔が立ち並ぶ光景が目に飛び込んでくる。御影石でこれほどの寄進者名を並べているのはここ

だけではなかろうか？　そして、それらはどれも明治以降のものなのだ。

笏谷石と御影石から

今年は石をテーマに湊を考えてきた。上越では、壺や甕などの大型陶器が十五世紀に珠洲焼から越前焼に換わっていくことが分かっている。それは航海術の進歩が要因で、生産地の問題ではないことを指摘した。笏谷石はそれ以前から石塔などの限られた製品が持ち込まれているが、今年の笏谷石集めの総括として青い石の多くは江戸後期以降に持ち込まれていることが推測されるに至った。その間、中世後期から江戸前期に搬入された笏谷石は、城や館からの出土品が主体で、武家社会で使用されたものと推測される。

これまで見てきたことから、笏谷石は中世の石塔、江戸前期までの石鉢や瓦など武家社会の需要と進み、江戸後期（文化文政期、十九世紀前半）に至って広く普及していったことが分かってきた。そして、爆発的に需要層となったのは、日本海を行き交った廻船の船主たちだったと推測される。それも江戸時代の後期から明治前半が最盛期と考えられる。

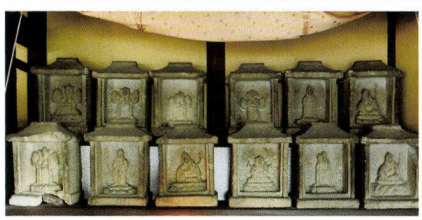
さらに、その後を追うように大量に流入したのが御影石で、その量は笏谷石の比ではなく、瞬く間に主役の座に躍り出たのであろう。その担い手は、北前船ではなく、洋式の汽船であったことは想像に難くない。

直江津は日本海のほぼ中心に位置している。そして、陸路は長野を経由して東京や名古屋に近い。このような地理的な利便性から、古代には国府がおかれ、中世には府中として栄えた。それを支えていたのは紛れもなく湊の存在であり、都が奈良から京都へ、そして東京へ移っても、日本海の湊として重きを成してきたのであろう。

その証は、黙して語ることのないものである。その中から青い石に魅せられて考えをめぐらせてきた。読者の皆さんにもぜひ参加していただき、皆さんそれぞれの視点で越後府中直江津に思いを馳せていただきたい。

（上越市専門学芸員）



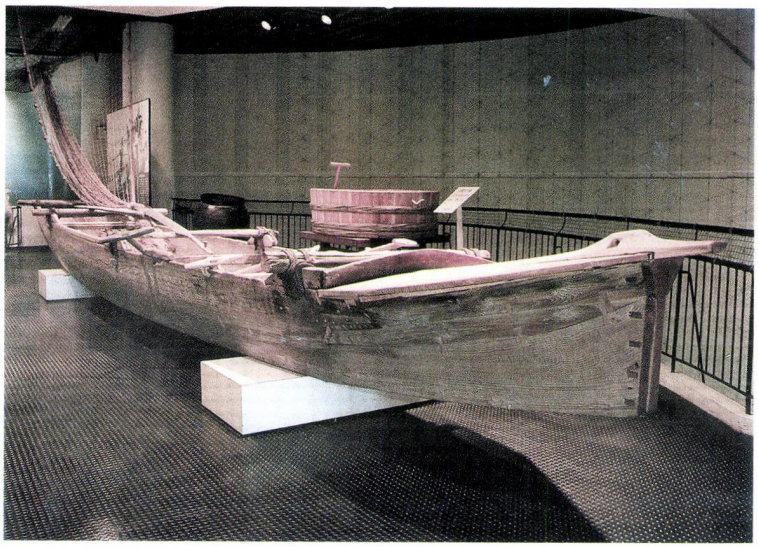


針観音堂　三十三観音
中央の阿弥陀仏を囲み、笏谷石に彫り込まれた33体の千手観音が祀られている。平成30年8月、33年ぶりに開帳された。

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

市民の名誉「どぶね」



旧水族館に展示されていた「どぶね」（「上越市の文化財」より）

水族館の歴史は、昭和九年に八坂神社前に私立水族館が開かれたことに始まる。本格的な水族館は昭和二四年、有志によって開館した直江津水族館である。二八年に直江津市立となり、三二年には直江津中学校北側の松林に移転。五五年に直江津高校のテニスコート跡に、巻貝と「どぶね」をモチーフに斬新なデザインの新水族館が建設され、長く来館者に親しまれてきた。

「どぶね」とは、地引網に使われた木造船である。雪の圧力で曲がった根曲がり杉を用い、木のクサビとウルシで接合造船している。日本の造船技術の歴史を物語る技法が用いられているとして、文化財に指定された。

水族館が直江津市立になるに先立って、昭和二九年に「どぶね」が、右の理由で国の重要文化財（有形民俗）に指定された。それを保管することで、「博物館法」による全国に七つしかない水族博物館（現在も県内唯一）の一つとして登録され、直江津市立水族博物館となった。

市長にして教育者の佐藤策次の提案で創刊された、極めて質が高く、いまでも資料価値の高い「こどもこうほうなおえつ」は、水族館の歴史で「昭和二九年七月に国指定重要文化財となった『どぶね』を保管することになり、名称も『水族博物館』と変わりました」と、誇らしげに書いている。また、「〈博物館〉であることは直江津市民としての名誉である」と書いているものもある。

いまさら「博物館」と声高に言わなくても、展示しなくても……、という気分も分らないではないが、「古くっさい」「ふるしい」と片付けていいものだろうか。

「どぶね」は、私たちの「今日」への手紙。「当時の市民としての名誉とは如何」と、問いかけているのではないのだろうか。（和）

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

あとがき

新年おめでとうございます

三十年前に「平成」の元号がテレビに流れた場面を鮮明に覚えております。

まもなく新しい元号の船が出航します。新しい船には新しい水夫が必要となります。波、風、高いと予想されますが、力を合わせて無事に航海を乗り切ることを祈るばかりです。

本年もご愛読をお願いいたします。

（梅田）

目　次

特集「日本遺産」認定記念
荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
～北前船寄港地・船主集落～とは　4
国府―春日山―府中―直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中　7
笏谷石を求めて
上越市専門学芸員　小島幸雄　18
巻頭エッセイ・わたしの直江津
このまちの魅力　三宅莉依　2
歴史は「今日」への手紙
市民の名誉「どぶね」　30

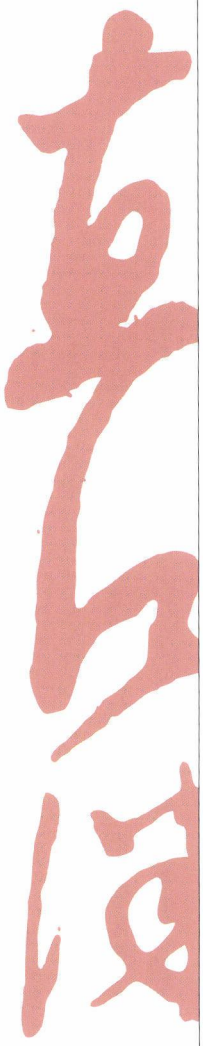
「直江の津」
第一五巻二号　通巻四三号
発行日／平成三〇年十二月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫総合企画室
電話（代）〇二五（五四三）三一八四
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2018・2号

直江の津



発行／平成三〇年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円